

## 〈研究ノート〉

### 節祭りー若水を汲むー

沖縄尚学高校 上原孝三

明治20(1887)年生の祖母は、目に一丁字もなかった。文字を書くのはフダイレ(札入れ。選挙)の時ぐらいで、それも人に書いてもらった文字を覚えて投票した。明治3・40年代で、文字をほとんど用いない半農半漁の村(沖縄県の宮古島・西原)ではそれが一般的だった、という。沖縄各地の農村でも似たような状況にあったろう。

祖母は口数こそ少なかったが、記憶力は抜群だった。曾孫をあやす際に子守歌や童歌をよく口ずさんでいた。40年前に鬼籍に入った祖母が、童歌の一つである「ユーサ」の歌を覚えていたかどうかは確認しようがない。ここでは、上野村・ガーラバリ(ガーラ原)の「ユーサ」の事例(1983年)を紹介したい。

しちいんな	ゆーさ	さぎ	節には	ぶらんこを	(掛け)下げ
ゆーさんかいや	ぬーいびゃー		ぶらんこに	乗りたい	
ばかみっじゅ	あみびゃー		若水を(も)	浴みたい	

「ゆーさ」はぶらんこのこと。「しちい」(節。節祭り)にぶらんこ遊びを行うことは子供達には大きな楽しみだった。しかし、何故節祭りに「若水」を汲むのか、その意味が分からなかった。その疑問を歌い手やその他の地域の老人に質問しても頭を傾げるばかりで、明確な返答は帰ってこなかった。童歌の調査を行った1980年代にはそもそも節行事がほとんど行われてなく、老人の記憶の中にわずかに歌としてその痕跡が残っていただけだった。節祭りに何故子供達はブランコに乗るのか。ブランコの民俗的意味も未だ解明されないままだ。

8年ほど前、たまたま西表島・祖納(そない)の節祭りを見に行ったことがある。西表島に一度も行ったことがないこと、写真などにみる黒朝衣を頭からすっぽり被ったアンガマの異様な扮装を実見したかったからでもある。祖納の節祭りは国の重要民俗文化財に指定されている。旧暦の8・9月の己亥の日から3日間に亘って行われ、収穫の感謝と来年の豊作を祈願する。

そもそもの経緯は忘れてしまったが、祖納の節祭りの期間中にかつて各戸で行った儀礼を、ある方に再現していただくことになった。「トウシィンユー(年の夜)には屋内を清浄にするため、ウル(サンゴ)を柱や壁に投げつけたよ」とおっしゃり、大声で何かを唱えながら(早口の祖納方言だったので、何と言ったか意味不明だった)、実際に家壁や柱にウルを投げつけた。ガラガラガラと床が鳴り響いた。

「トウシィンユー」という言葉を聴いた当初、言い間違い(筆者の聴き違い)ではないかと思ひ、同行の言語学・方言学専門の加治久真市先生(八重山・鳩間島出身)に確認してみたところ、間違いではないとのことであった。突然、祖納の節祭りと宮古の節祭りとが電光石火のご

とく結びついた。かつては、宮古・八重山一円の両先島地域に節祭りが存在していたのではないかと。つまり宮古・八重山地域には暦の1月1日とは異なる正月（節祭り）があった。

祖納の他に八重山各地にも節祭りがある。石垣島の「裏石垣」と呼ばれる地域、即ち平久保・伊原間・野底・仲筋・川平などでも見られたが、廃村や信仰の衰微などで、それらの地域では現在川平以外は消滅している。川平では旧暦9・10月の戊戌の日から5日間に亘って行われる。

祭りの初日に来訪神マユンガナシィ（真世加那志。豊饒の神）が各戸を訪れ、カンフチィ（神口。神の言葉）を寿ぐ。豊穰予祝の神口にマユンガナシィは「ミードウシィ」（新しい年）と唱えている。

クバ笠を被り、顔をタオルで隠し、蓑で身体を覆い、6尺棒を手にしているマユンガナシィは歳神なのだ。約1時間に及ぶ神口を終えたマユンガナシィを家人が接待し、その家での儀礼は終了する。

祖納・川平の節祭りでは、祭祀期間中にバカミジィ（若水）を汲んだ。節祭りは、新年・正月を迎える行事だったのだ。その祭りが消滅した地域でも、かつては若水を汲んだと思われる。

宮古諸島でも旧暦5・6月に行われていた節祭りが、ほとんどの地域で消滅してしまった。節祭りには若水を汲んでいたという。若水を汲み、新年を迎えたことになろう。だが、若水を汲むことにどのような意義があるのか。

言語の天才ロシア人のニコライ・ネフスキーは、宮古を三度訪れていて宮古各地を調査している。大正11（1922）年の夏、ネフスキーは多良間島に滞在していた。ネフスキーは言語・民俗資料としての民間伝承にも興味を抱いていた。そして、垣花春綱という青年から次のような物語を聞いた。

むかしむかし節（シツ）の夕に天から水を下ろして下されたから「人から先に浴びろ」との事でしたが、人間がまけて蛇が先になつて浴びたので、人間は仕方なしに手と足を先に洗った。だから爪だけがいくらぬいても、つぎからつぎへと生へて来るのである。蛇は死んでもどんどん蘇生してくけるのである。（「月と不死」（二）『民族』昭和3年）

シチィ（節祭り）の「アラユー」（新しい夜。新年の夜）に、天から下ろされた水はシディミジィ（孵で水。脱皮し生まれ変わる水）、つまり不死の水だった。人間が浴びるはずだったが、蛇が浴びてしまったのだ。

4年後の1926年の夏、ネフスキーは宮古島・平良の漲水港から出立する際に、慶世村恒任から聞いた「アカリヤザガマ」（アカリヤ・ツザガマの誤記であろう。輝ける老人）の神話を記録した。それは、月で2個の水桶（死に水と不死の水）を担ぐ持つ男の話であった。「アカリヤザガマ」は、人間に不死の水を与えよ、という天の神の使命を果たせず、罰として桶を担いで月に立たされているのだった。

ネフスキーは宮古調査で得た節祭りや民俗伝承資料を元に、『万葉集辞典』（大正8年刊行）の「月読」に関する折口信夫の解釈、即ち中国の月信仰が日本へ伝来したのではないかと推論

したそれを批判した。

節祭りにおいては月と水と不死は密接に結びついていた。現在、その主要なテーマだった不死がどこかに忘れ去られていて、収穫祝いと豊饒予祝が全面に押し出されている。

さて、筆者は2年前に多良間島のシチウプナカを実見する機会に恵まれた。多良間島では旧暦4・5月の壬辰か癸巳の日にシチウプナカが執行される。シチは節、ウプナカは大きな祭りの意。従って、シチウプナカは節の大祭の意になろう。

シチウプナカ祭の主な実修者は、イムザ（海座。祭祀用の魚を捕る集団）、カンジンザ（勸進座。祭祀の準備・進行を担当する集団）、チュウロウザ（中老座。祭祀を実施する際に中心的な役割を果たす集団）、クバンザ（クバン座。料理を作る集団）、ブシャザ（ブシャ座。神酒を造り祭場の準備をする集団）などと呼ばれる、職能分掌集団を形成する男性祭祀集団である。

祭りの内容は、豊穰への感謝と来年の豊穰予祝である。ナガシガー（長瀬井戸）、フダヤー（札屋）、パイジュニ（南宗根。パイドゥニともいう）、アレーキ（語義未詳）の4つの祭祀集団・祭祀場所があり、それぞれの祭祀集団が各自の拝所を順次巡拝し、祈願を捧げた後、神歌ニリヤペーシィを謡う。

この祭りには、バカミジィ（若水）・シィディミジィ（孵で水）を汲み、浴びる習慣があった。即ちシチウプナカは、季節の変わり目、あるいは年の変わり目という性格を持った祭祀である。

シチウプナカ祭でしか謡われぬ「ヤーヌトゥジィ・ヌ・ニル」（家の妻の歌。現在は演唱者不在）の歌の中に、

さうがちいどう やりば 正月で あるから  
みいーどうしいどう やりば 新年で あるから

とある。この詞章からシチウプナカは新年を迎える祭祀であったことが歌謡でも証明される。

男達は正月を祝し、嬉々としてペーシィ・「ヤッカヤッカ」を謡い、グラスにいれた泡盛を一気飲みする。朝から夜中まで5日間飲み続ける泡盛の量たるや半端ではない。宮古島市の池間・佐良浜・西原の3カ字にはミャークジィチィ（宮古節）という祭りがある。節祭りである。

ミャークジィチィは、旧暦8・9月の甲午の日から4日間に亘って行われる。ミャークは、宮古・この世・現世の意味がある。ジィチィはシィチィの濁音であり、「月」もしくは「節」のいずれかの字が当てられるが、「節」が正しいと考える。祭りの内容は、豊穰と無事納税したことへの感謝と来年の豊穰予祝である。村人の健康祈願も含まれる。

池間島では、55歳以上の男性が、血縁集団の宗家であるムトゥ（元）に集まる。四つの元があるが、人々は「明けましておめでとうございます」（『おきなわの祭り』沖縄タイムス社「池間のミャークジィチィ」の項目）と挨拶を交わす。挨拶は、バカミジィ・スイディミジィ（若水・孵で水）を汲んだことから、ミャークジィチィを節替わり、つまり新年の祭りである、と意識している証左に外ならない。祭祀は年齢階梯制的祭祀集団・ムトゥヌウヤ（元の親）が主

な実施者となる。

また、ミヤークジイチでは各元で新生児の報告と登録もなされるが、佐良浜・西原でも同様な行為が行われる。新生児の報告と登録との観点から言えば、旧暦6月に行われる伊良部島の伊良部・仲地のダチマシイ（抱き升）祭も節祭りの一種だろう。新しく生まれる年・節祭り、その祭祀で新しい生命の新生児の神への報告・登録儀礼行為は偶然の一致ではあるまい。

佐良浜・西原もミヤークジイチを行うが、西原は池間同様バカミジイ・スディミジイ（若水・孵で水）を汲んだ。西原のある老婆の話に拠ると、かつてはヒダガー（辺端井泉。湧泉）から若水を汲み、その周辺から薪を拾った。家に持ち帰り薪に火をつけるが、それをアラウマチイ（新しい焚き火。新年の火）と称したという。

僥倖。その話を聴いた瞬間、そう思った。ミヤークジイチ調査の折偶然に聴いたので、他日会うことを期し、詳細な話を伺うため3ヶ月後に訪れたが、あろうことか老婆は他界されていた。ショックでもあり落胆も味わったが、何とも言い難い複雑な思いがした。

ミヤークジイチは、新年を迎える行事だった。旧暦8・9月の甲午の日から行われるが、元来その月に行われていたかについては疑問が残る。宮古では稲はあまり栽培されず、主食は粟だった。粟の収穫は、旧暦5・6月であったから、旧暦8・9月の収穫祭は遅すぎる。また、干支の「甲午」も暦の知識がなければ、日和（日撰り）を選定できない。従って、ミヤークジイチは為政者（暦法を知っている者）の意向が反映されていると見るべきであろう。

宮古島市の狩俣・島尻・大浦では「節祭り」が旧暦6月に行われる。単にシイチイ（節）という。現行民俗では見られないが、狩俣では旧暦6月にバカミジイ（若水）を汲んでいたという。かつて、定められた場所から小石を拾い、洗った小石を水と共に鍋にいれ沸騰させたという。その後、小石は農耕用具に縛り付け、一方では家の裏座のマシギタ（梁）の上に置いた。身体が石のように強くありたい、穀物の実が石のように堅く実って欲しいという呪的行為という説明がなされるが、詳細については不明。

昼から夕方にかけて、小・中学生の男子数人が各戸を訪れ、豊穰への感謝と来年の豊穰予祝の言葉を寿いだ後、その家の庭で円陣になって「ユーヤナウレ ユーヤナウレ」（世は稔れ。世は稔れ）と唱えつつ踊る。少年達は踊り終了後、その家の人からお菓子などをもらう。70年程前の狩俣では、アーヌイ（粟の飯。粟のおにぎり）をもらった。

狩俣・島尻・大浦の節祭りで各戸を訪れる少年達は、川平のマユンガナシイに相当するのではないか。来訪神マユンガナシイの変形・零落した姿が、少年達ではないだろうか。粟のおにぎり・お菓子などを与える行為は、来訪神への接待だったかもしれない。

いずれにせよ、節祭りに人は若水を汲み、歳神がユー（豊饒）をもたらした祭祀儀礼だった。宮古・八重山の節祭りは、太陰暦正月が導入・実施される以前の、自然暦（農耕暦）に基づいた昔の新年・正月であろう。極めて注目すべき行事である、と思う。

同祭の分布状況としては、文化・行政の中心地やその周辺にはなく、僻地・離島に分布するのが大きな特長で、それには何らかの理由が存在するのだろう。

奄美諸島では旧暦8月に「アラシツ」（新節）という行事がある。奄美・宮古・八重山諸島

に節祭りがあったなら、同じ琉球文化圏である沖縄諸島に節祭りが無いというのはおかしい。現行民俗で沖縄地方に節祭りが無いのは、恐らく王権と関係するものと予想される。

奄美諸島では旧暦8月に、アラシツ・シバサシ・ドンガという一連の行事が行われる。小野重郎はシバサシ・ドンガをシツ行事から派生したものと捉えている。沖縄諸島では同時期に、シバサシ・ヨーカビーがある。この2地域を比較し、小野は沖縄諸島にもかつてはシツ（節祭り）があったと考えている（「アラシツ・シバサシ小論」1974年）。つまり、開催時期は異なるにせよ、かつては琉球文化圏全域に節祭りが存在したと想定したのであった。

沖縄民俗学の世界では、節祭りがかつての新年・正月ではないかと指摘する声もあり、重要な祭祀であると捉えているが、十全に説明を行った確実な説はまだ出ていない。従って今後、節祭りを再検討する必要がある。人が創り出した暦と、自然の季節的な周期性を持つ節祭りの間に、本来的に密接なつながりがあるとは思えない。穀物である稲・粟の生産と祭事歴は無関係である筈がない。

新年を迎えることは、古い年を送り出すことであり、それは季節の循環を意味する。季節は廻り、時は進行する。時の進行に従い人は歴史を刻む。もしかすると、時の発明は神話的世界との決別であったかもしれない。

ともあれ、かつて宮城真治が昭和29（1954）年に提唱した「古代沖縄の正月は旧暦8月だった」という夏正月説も、節祭りと関連づけて今一度検討する必要に迫られているのではないか。この検証には、統治者が用いる支配のための暦が発達する以前の社会を想定しなければならない。更にいえば、国家（琉球王国）成立以前の村落共同体単位のもっと根深いところから考えなければならない要素を多分に持っている気がする。

沖縄各地で老人の方々から童歌を聴く機会がある。おもしろい内容の歌であっても何かしら哀調を帯びているような気がしてならない。筆者の個人的な感傷のせいであろうか。「ユーサ」の歌は節祭りを待ちこがれていた子供達の切ない訴えだったが、どこかしら掴みようのない哀しみを聴いたように感じた。あるいはそれは、滅び行く世界の音かもしれぬ。